

書評

華嚴思想

鍵 主 良 敏

近年、華嚴學に對する批判的、分析的研究が生れつつあるのであるが、その學的成果は必ずしも多くない。佛教學の主要な支柱として、古くより先人達が研鑽を重ねてきた華嚴學は、明治以後の新しい方法論による研究對象とはなりつつも、いまだ充分に検討し盡されたものとはいえないのである。

即ち從來の華嚴研究は、ともすれば祖述的訓詁學の域に籠り、單なる教理の紹介に留まりがちであつたのであるが、それに對し本論文集では、華嚴經を説明していく過程において常に問題提起の形をとり、新しい觀點から學的究明がなされているのであり、その研究方法の根柢は常に實證的態度によつて貫かれ、梵語、チベット語を驅使したインド佛教の立場による華嚴研究に重點が置かれている。従つて中國において大成した華嚴教學の研究ではないから、教理的問題の體系的解明が等閑視されて

いる感があるが、それは研究者の關心が今は直接的にはそこないことを意味するのであろうか。今後の研究成果に期するところ大である。

尙、この論文集は、川田熊太郎博士の還曆を記念し、華嚴經を研究主題として、東大印哲研究室關係の學者が、それぞれ獨自な題目のもとに研究し、その成果を編集したものであり、八編の論文と文獻目錄とからなつてゐる。その中の一編は明治二十九年東大哲學科の卒業論文であり、新舊研究態度の相違・特質を比較する上にも興味深いものがある。

折角の好論文に誤植の多いのが惜しまれるが、以下々の所論についてその概要を述べることにする。

佛陀華嚴

(川田熊太郎)

著者の結論に見られるように、この論文は、華嚴經を中國華嚴宗の立場ではなしに、インド佛教の立場から解明したものである。先ず(一)經名「大方廣佛華嚴經」について梵語文獻による詳細な検討が加えられ、次いで(二)その構造が述べられる。前篇(離世間品まで)は、如來の緣起、後篇(入法界品)は如去の緣起を述べるものであり、この如來と如去の緣起が、一經の明らかにしよう

とするもの、即ち佛陀華嚴に他ならぬとする。次に經の思想が述べられる。信・住・行・向・地の考察を通して第一部の中心が十地品にあるとし、十波羅蜜等と十地との關係が明らかにされるのである。第二部入法界品については、五十三善知識の名とその説いた法門を列挙し、善財の菩薩道とは、悲が智慧と慈と行とに導かれて覺を得るすがたであるとする。次に(三)經の宗と趣を因果の緣起と現實の法界にみ、(四)覺者の宗教と華嚴經において、「宗教」と「religion」についての比較研究から「宗教」の本來的意味を明瞭にし、覺者ゴータマの宗は、心の根本眞理である深緣起であり、その教は深緣起と同一なる四聖諦であるとする。そして華嚴經を、覺者の自證法とそれに基づく本住法、即ち法界を唯心緣起として教えるものと理解するのである。

華嚴經の思想史的意義

(中村 元)

この論文は世界の思想史の中に生きている「華嚴經」のすがたを、いくつかの問題點から解明したものである。即ち、(一)經典の立場は歴史的制約を斷ち切つてより廣い普遍的基盤にもとづくとし、菩薩道、唯心思想を以つて經を概観している。次に(二)經の成立時並びに場所に

ついでに考察が行われ、(三)中觀思想との連絡では、諸法實相の原語とそれぞれの意義を言語學的に研究して、諸法實相は「緣起の理法」を指していると結論し、兩者を對立的に考える見解は、華嚴經そのものに適用されない。華嚴經は般若經等を基礎とし、その上に獨自の思想を展開しているとして、中國佛教を通してのみ華嚴經を見ることへの批判がなされる。更に(四)眞理の領域では、ギリシャの哲學者プロティノスとの連關から、事々無碍の思想を經中にみ、(五)慈悲について文獻を提示し、(六)シナの變容として、性の倫理と身分倫理に中心をおいて華嚴經のシナの推移を述べ、最後に(七)日本人のうちに生きている華嚴經を明らかにしている。以上この論文は統一的に一つの主題を追求したものではないが、著者が華嚴經より感得した問題點を、適確に表明している點は、その實證的方法論と共に學ぶべきものがあると思われる。

華嚴經に見られる初期大乘教徒の宗教生活

(平川 彰)

先ず(一)阿舍、アビダルマに於ける在家信者への考察から、自燈明法燈明の在家信者における意味を反省し、その歸依の對象が何かに至つて、「佛歸依」の意味を問題

提起する。次に(一)佛塔信仰から大乘の佛陀觀の展開過程をみ、アビダルマの教理に見すてられた在家信者達は、どこに自己救済の道を求め得たかの問題を出して、(二)華嚴經淨行品により大乘菩薩の日常的在り方を明らかにしようとする。そして(四)菩薩の在家生活についての考察、(五)菩薩の出家についての考察、(六)佛塔による佛陀への信仰を基本とした菩薩の日常生活についての考察が行われ、(七)小乗戒を否定する十善戒等の利他的性格から華嚴の戒を述べて、最後に(八)大乘の戒が眞俗を一貫する立場にならざるを得なかつた必然性を追求するのである。

緣起と唯心

(三枝充恵)

この論文は十地經類と龍樹とを、緣起——唯心の交錯する軸においてとらえようとする。即ち、成立のはやい十地經類をとりあげて、その中に唯心を探究し、それと十二因縁との關聯を考察するのである。従つて(一)緣起をできるだけ廣義に解し、それが十地經類の中にどのような説かれ、どの箇所によく論じられているかを究明し、第六現前地に焦點が向けられる。ついで(二)現前地における緣起を解明し、それと唯心との關係をたどると、十二因縁と唯心とが問題になる。(三)その緣起と唯心——十二

因縁と唯心の關係を、龍樹のそれら二者に關する資料の提起によつて明かすのである。以上、唯心と緣起について十地經類より詳細な資料を挙げ異譯對照したこと、また龍樹の著作における「心」に關する資料を提示したこととは、この問題に關心を持つ者に多大の便宜を與えるのであるが、問題の取上げ方により方法論は幾種も考えられるとすれば、これら諸資料より一層の研究成果が望まれよう。

華嚴教學と如來藏思想

(高崎直道)

筆者はここで、「性起」思想の發展を考察するに當り、「華嚴性起經」の含む思想が、如來藏系の諸經論において、どのように展開しているかを検討しようとする。即ち(一)六十華嚴「性起品」を中心に他の漢譯異本及びチベット譯により、「性起」の語の用例を挙げ、華嚴教學における性起思想の裏付けとなる語は六十華嚴にしか見られないとの結論を得、(二)チベット譯を主體に「如來出現」の意義を解明し、「成覺」と「法身の顯現」の二方面から、性起正法の十相顯現は、如來が衆生を救うんがために正覺を成じてこの世に出現することだと述べる經の言を以つて端的な特質とする。次に(四)、(五)如來種

姓と如來性を、言語學語源學の解釋により、インド一般の用法と比較して考察し、又佛典中に現われたものからの考察を行う。そして(内)實性論の主題は、「性起經」のいう「如來出現」と同一のことを「因」の立場から説明していると推定し、(外)實性論は如何なる形で性起經の思想を受けついだかを確め、性起經から實性論への性起思想發展の歴史を考察するのである。

唯心の追究

(玉城康四郎)

十地經の三界唯心に始まつて、シナ華嚴宗の智儼、法藏、澄觀のなかに唯心の問題が如何に展開しているかを考察したものである。(一)十地經における三界唯心の諸問題では、心の一般的意味をあげ、三界唯心の心は經においては妄心であると、次に世親の解釋を、三界唯心がそのまま第一義諦を表現すると解す客觀的態度と、三界唯心を觀ずることが第一義諦を證し解脱を得るという、觀法の實踐において第一義諦を認證する主體的態度の二方面から把握し、十二因緣所依の一心は、經において妄心であるが、世親の釋はそれを、我を離れた所の一心、第一義諦の眞心と解しているとする。ついで世親解釋の問題点をあげ、それを解明するものとして、三界唯心に

對する第三の解釋としての主體的態度の徹底性を述べるのである。一心を眞心とするか妄心とするかは甚だ異論の多いところであるが、この第三の立場として明されたものは著者獨自の見解であり、興味ある見方である。

次に(二)智儼の思想として、彼は三界唯心の心を梨耶心とすること、その梨耶心アラヤ識は、第一義清淨心であり、如來藏であつて、客觀的無記性としてのアラヤ識は主體的如來藏へ高められ、そこに智儼の體驗を通した心の主體的解釋があるとする。しかし(三)法藏では、唯心はその心的性質が奪われて理體もしくは智體となり、遂にはそれも消えて事事無礙のみとなるとし、(四)澄觀では三界虛妄に對して一心を直ちに第一義諦となさず、法性宗に關して能作の一心を強調することを述べ、法藏に對する澄觀の特質として、事事無礙の組織的な展開に満足せず、その無礙性をみずから證悟し自覺しようとする觀法實踐を重視する立場を強調し、その體驗化は荷澤神會の禪系統につながり、無念即靈知の自覺に深く結びついているとみて、佛教唯心思想の哲學より宗教への展開の跡をたどるのである。

華嚴哲學の根本的立場

(鎌田茂雄)

本論文は、(一)教理的にすぐれた展開がなされた爲に、哲學的思索により眞理を把握できるといふとき印象を與える法藏哲學の基礎になる教相即觀法という實踐論の構造を説明し、その歴史的背景をさぐるのが目的である。即ち(二)華嚴觀法の分類とその構造では、法界觀を法界に悟入する觀(悟入觀)と、法界に住して現實を照す觀(性起觀)との二面から理解し、その立場から種々の觀法を體系的に把握しようとする。まず智儼、法藏以下の華嚴學者が分類した觀法をあげ、淺より深へと觀の過程を段階的に深める悟入觀を説明し、次に性起觀を直觀的に眞理を把握する立場、しかもそれは單に悟入觀の究極したものでなく、不可說の眞如本覺より、可說の論理、言語に出る立場とするのである。そして(三)現象絶對論——十玄緣起無礙觀では、性起觀という實踐的性格をもつ唯心によつて根底づけられたものとして十玄緣起觀を理解し、それが觀法即教義として成立した思想構造である點を、天台の觀心門と比較し、そこに明らかにされる法藏の實踐を教義の中に解消して凡夫の立場を捨てた超越的な現象絶對論が、どのような歴史的背景の上に形成されたかを検討し、最後に結語として、華嚴の事事無礙思想は單なる現實肯定論ではなく、宗教的直覺の上に

展開することにおいてその意味を失わない點を強調する。即ち歴史的社會的背景を加味しつつ、華嚴哲學における實踐の問題を説明したところに本論文の主題はあると思われるのである。

ライプニッツ氏ト華嚴宗

(故 村上俊江)

ドイツ唯心論哲學の始源をなすライプニッツの思想と、華嚴教學における事事無礙思想を比較考證した明治二十九年の東大哲學科卒業論文である。佛教思想を文學的、實證的に理解していこうとする現今の研究方法に對し、自己の主體的態度からその本質を把握しようとしたかつての研究態度がうかがわれ非常に興味深いものがある。論旨であるライプニッツのモナド論と華嚴の眞如觀の對比等は、比較研究として面白い問題であるとはいへ、實體概念を越えることのできないモナド論を、眞如に對することそのことに無理があると思われるが、自己の哲學的問題として思想を理解しようとする著者の態度には、特に今日、我々の佛教研究に反省すべき點あるを示唆しているといえるであらう。

概説書（單行本）、五教章とその註釋書、華嚴經とその註釋書、中國華嚴宗の典籍、日本華嚴宗の典籍、近代における華嚴研究の動向の六項目に分け、インド・中國・日本にわたつて現在までにおける華嚴學研究の文獻並びに資料としての典籍をほとんど網羅し、必要部分には解説を加えつつ紹介した勞作である。凝然などの目録にみられる典籍の紹介に、明治以後の研究動向の概説を校合して、兩者の理解を得易からしめるようにしたという著者の言葉通り、典籍と研究論文が同時に提示されているので非常に便利であり、典籍資料としても、普通には見られない華嚴研究の和刻本も紹介してあるため、今後華嚴學研究に志さす者に多大の利益を與える文獻目録となつてゐる。著者の緻密周到な勞を多としたい。

（本文五二六頁、他に索引、英文梗概、A5版、定價一七〇〇圓、法藏館發行）

大谷學報 前々號目次

羅什—法雲時代の佛性説……………富貴原章信

自由のための計畫と

知的エリートの問題……………柴田良稔

アーヴィン・ヴィンカについて……………雲井昭善

平家物語に於ける人間像……………渡邊貞麿

曇鸞大師の二種法身説……………柴田悟